

火野葦平選集

第一卷

火野葦平選集第一卷

東京創元社版

火野葦平選集第一卷

昭和三十三年五月三十一日初版

定價五〇〇圓

著者 火野葦平 ひのあしへい

發行者 小林茂

印刷者 田中末吉

東京都新宿區新小川町一ノ一六

東京創元社發行

電話(33)八五一一(代表)

振替東京一五六五

印刷・理想社 製本・鈴木

第一卷目次

糞尿譚

河豚

山芋

山芋日記

山芋と煙突

修驗道

帝釋峽記

梅の園まで

雨後

三

咒

穴

八

二四

二五

二六

二五

二七

春日

二〇一

山峽にて

二二三

吉田山

二二七

歴史

二四七

土鈴

二六四

三福湯

二八三

船

三〇一

黄金部落

三〇六

解説

四一九

火野葦平選集 第一卷

糞尿譚

どこかでは既に雨が降っているのか、白く光つて見あげるようにむくむくともりあがつた入道雲の方向で、かすかな遠雷のとどろきがして居る。斜面を下りながら、彦太郎は、麥藁帽子の縁に手をかけて空を見あげ、一雨来るかも知れんと思い、灼けるように陽炎をあげている周囲を見わたすと、心なしか、さつと、一陣の冷たい風が来て西瓜畑の葉を鳴らした。緒土の中にくろがつた大小さまさまの西瓜は埃にまみれて禿げたような青い色を晒している。下りながら、兩手で輪をつくり、口にあて

て、おうい、と叫ぶと、小さく下に見える池の中央に入つて、眞裸で兩手を水中につつこんでいた男が、顔をあげた。彦太郎だと知ると、下の方で背を伸ばし、伸びをして腰を叩き、こちらに笑いかけたのが遠目にもわかつた。土埃をたてて斜面を駆け下ると、憎力で危うく池の中に飛びこみそうになつたが、岸にある無花果の樹にようやくつかまつた。顔見合わせ大聲立てて笑つた。卯平さん、あんた、なにしているか、と彦太郎はもう草の上に坐りこんで腰から鈍豆煙管を取り出し、雁首にきざみをつめながら訊いた。びしよ濡れになつた上に額から汗が流れおちて眼に入るのを、卯平は泥だらけの手で拭くわけに行かず、腕でずるとなで、食用蛙を捕まえてやろうと思つているのだが、なかなか見つからないので、仕方がないから池を干そうと思つて泥吐口を抜きよつたところだと云つた。食用蛙が居るのか、と彦太郎はびつくりした顔で訊き返した。どうも四五日前から妙な聲で鳴く奴がある。確かに食用蛙に違いないと思つて探し廻つたがさつぱりわからんのだ、池の底に隠れているに違いないと思つて掻き廻してみても出て来ん、がまの穂を餌にして釣りかかつてみたが食いつかん、夜中になると嫌な聲を出して鳴きやがる、がぁおん、がぁおん、というような赤子のような聲で、女房はあんな工合だし、癪にさわつてさつぱり寝つかれん、仕方がないから、こんな

小さな池だし、干してやれと思つて、先刻泥吐口を抜こうと思つて池の中に入つたんだが、口が赭土を咬えこんでいるのか、なかなか栓が動かんで骨折つたところだ、どうしても捕まえにや腹が癒えん、と話しながら、卯平はまた兩手を赤く濁つた水の中につつこみ、息を吸いこんで顔をしかめたと見る間に、水煙をあげて池の中に沈んでしまつた。しばらくぶくぶく泡が立っているのを彦太郎はじつと見つめながら、卯平がなかなか上つて來ないので少し不安になりはじめたが、すると、今まで騒いでいた水面が、波紋をおさめじつと動かなくなつた。彦太郎は急に胸がどきどきだし、何かに引つかかつて上れなくなつたと思ひ、入つて助ける氣になつてシャツを脱いだ。股引のバンドに手をつけた時、突然池の中でがばうという大きな音がし、ごうという音といつしよに吸いつけられる勢で水が布を裂くように鳴る音が聞え、水面が渦巻きたしまん中にばかりと卯平の顔が出た。ぶるぶると頭を振り、があと唾をはき、くそう、えらい骨を折らしやがつた、と云つて、右手に持つていた栓を岸の草の上に投げて、きよとんと立つていた彦太郎の顔を見て、聲を立てて笑つた。土堤の下の方で水の抜けるはげしい音が聞え、眼に見えて水面が下りはじめた。まるで河童じやな、あんた、と彦太郎が云うのに答えず、卯平は鋭い目附になつて注意深く池の中をあちこちと眺め廻した。

脱いだシャツをまた着なおして、彦太郎も岸邊の叢などに眼をやつた。水すましが慌てたように水面を舞つたり、小さな青蛙が飛んだり、爪の赤い蟹が倉皇として逃げたりしたが、食用蛙の姿は見えなかつた。居らんぞ、あんた、と彦太郎が投げ出したように云うのに、卯平は何にもいわず、じつと池の面から眼を離さなかつた。彦太郎は退屈して又草の上に腰を下したが、何氣なしに横を見上げた途端、彼は飛び上らんばかりに驚いた。一間とは離れていない小屋の窓に、髪をさんばらに顔に垂らし、ぎろぎろと大きな眼を見ひらいて彼を睨みつけている白衣の女の姿があつた。彦太郎は我にもなく驚愕した自分がてれ臭くなつたので、卯平に聲をかけ、ごりよんさんはまださつぱりせんらしいな、と云つた。卯平はようやく水面から眼を離して、窓から身體をのし出して、泣くとも怒つたともつかぬ、くずれたような表情を湛え、日頃から大きい眼が、瘦せ細つたために、飛び出したように見える腫を据えて、齒を噛むような聲を立てて笑い出した女房に、いきなり擱んでいた泥を投げつけ、ちようッ、と動物を迫うように呶鳴り、坐つて居れ、と叫び何か大きな聲でお經のような文句を云つた。馬鹿、馬鹿、と女房は急に勢が抜けたように肩をすぼめ、引つこんで、暗い土間に坐りこんだらしかつた。困つたもんだ、と卯平の精悍な顔にちらと悲しげな影がすぎたが、すぐにも

との元氣な顔になつて、執念深い狐だ、今日で十日になるのにまだ出て行かん、戸まどいして女房に憑いたりなどして阿呆狐めが、齒がゆうてならん、その裏の稻荷の狐らしい、暴れて仕方がないので呪禁して貰つたらいくらおとなしくなつた。何とも知れんことを口走つたり、何でも手あたり次第に投げたり、暴れるので危ないから、山の總圓さんに來て貰つて、紙振で封じて貰つた、總圓さんは飲んだくれのようなやくざ山伏と人はいうけれども、俺はつくづくと今度だけはえらいと思つた、あまり暴れるので俺が大きな綱でぐるぐるまきに縛つておいたのに、どんなに頑丈にしても何時の間にか抜けてしまふのだ、ところが總圓さんは短いかんじんよりで手足の指を繋いで拜んだだけだが、それでもう自由がきかず、全くとなくなつた。二三日中には必ず狐を追ひ出してやると總圓さんも云つているから、間もなく癒るだろう、ただ何にも食べないので、瘦せて行く一方で、それを見るのが可哀そうだ、と次第に卯平は聲を落した、が、急に氣をとりなおすように、嬬も因果な奴さ、俺が道樂して居る間中苦勞をさせて、とうとう赤瀬の親方にひどい迷惑をかけて、お詫びかたがたこの山の番人みたいになつたが、百姓仕事ばかりさせて碌な目にも合わせず、揚句にや狐にまで取つ憑かれやがつた。そう云つて卯平はおかしそうに笑つた。自嘲するようなその笑い

は妙に空虚で、そのうそ寒い哄笑は、いきなりがんと彦太郎の胸を叩いた。彦太郎は眼を外らし、急にそわそわと落ちつかぬ風で、草の上から腰を上げると、まあ、ごりよんさんを大事にな、あんだ、と云い捨てて、逃げるように緒土の斜面を駆け上つて行つた。どしたかな、彦さん、と卯平が腑に落ちかねて、もう少し居つたら池も干上つてしまふぜ、食用蛙が捕まつたら、つけ焼にでもして久しぶりに一杯やろうではないかと、卯平が後から聲をかけたのが、最後の方は遠くなつた耳にもう聞えなかつた。西瓜畑の間を駆け抜けて、道路に出ると、彼は慌てて待たせてあつた貨物自動車の運轉臺に飛び乗つた。運轉手の澤田に急いで行くように命じ、トラックが動き出すと、ようやく安心したように坂の下を見た。卯平の姿が池の中に豆粒のように見えた。卯平が腹這いになつたような恰好をして何かを押えつけているらしく見えたのは、或いはとうとう食用蛙を見つけ出したのかも知れないと彦太郎は考えたが、それより彼は可哀そうな卯平の女房の居つた部屋の窓が氣になつて、くねくねと曲折する道路のため、見えたり隠れたりするのを、努力して探したが、もう白衣の女の姿は見えなかつた。トラックは開墾地の間を縫つている曲折の多い山道を濤々たる土煙をあげたやたと走つた。この邊は佐原山の頂上であつて、數年前までは笹や灌木などの密生した全くの荒蕪

地であつたのである。竹の根が深く土中を縫つてゐるために開墾には不適當とされていたのであつたが、先年この地方に防空演習が行われた際、この佐原山の絶頂に高射砲陣地を作ることとなり、登山路としては幅三尺にも足りぬ道しかなかつたため、工兵隊が来て數日の間に幅二間を越える立派な登山道を作つた。演習が終つた翌年、上海事變が勃發したが、廟行鎮攻撃の際に戦死した肉弾三勇士は、その時の道路開墾工事に従事して居つたのであつて、佐原山の頂上には立派なる三勇士の記念碑もある。この登山道の開通はこの市にとつてはまことに感謝すべきことであつた。この道の開通を契機として、佐原山は公園化し、この山を中心として各方面に出る新道路が縦横に開設され、従つて道路を中心として荒蕪地として放任されてゐた山頂の市有地がどんどん開墾されはじめ、現在では、どの丘も、どの斜面も、畠が連なり、果樹が栽培され、年々相當の收穫を擧げる農作地となつたのである。ここからはまともに蒼茫たる玄海灘を望むことが出来る。幾つかの島を浮かべたこの荒海は、雲と船と海鳥とをあしらつて繪のごとく美しい。それ故に直接鹽をふくんだ潮風を受けるために多少の風害はあるとしても、農民達は撓まざる努力に依つて、年々、大根、芋、葱などの野菜類はもとより、無花果、枇杷、梨、西瓜などの果物類も豊富にとれるようになったのである。これ

らの畠のある斜面につけられた道路を、彦太郎のトラックは疾走して行くのである。トラックに積んだ肥料桶がごとごとぶつかつて鳴つてゐる。二十荷のうち半分は空であるが、半分はつまつてゐるので、たばたばと時折音がする。彦太郎が卯平の所に寄つたのも、四荷ほど肥料を廻してくれるようにと頼まれていたからであつたのに、商賣も忘れてしまつて彦太郎は逃げ出して行くのである。嬢も因果な奴さ、と卯平の云つた言葉がびんと胸にひびき、彼は、苦勞させつづけている自分の女房と子供達のことを思い出し、今更のことではないけれども、日頃鼻柱の強い卯平が何時になくしんみりと述懐した様子が、やきがねのごとく彼の心を弾いたのである。今日で三月近くも彼は家に歸らない。三月前に歸つた時も、村の方に肥料を賣りに行つた序に立ち寄つただけで、壊れた竹垣の戸を開けて入つて行くと、女房のとしのは畠で草をむしつてゐたが彼の姿を見ても表情を變えず、畠の横を通り過ぎて家の方へ行く彦太郎の背後から、顔も上げずに無盡會社が來とつたですよ、と一言云つたきりのろくさい手附でしきりと草をむしりつづけていた。緒ら顔を手でこすり、彼は家の前に立ちだかつて、くすぶつた野、土のはげた壁を、ひとわたり見わたし、字の見えなくなつた表札を凝視して、今に見て居れ、今に見て居れ、と呪文のごとく呟いた。坂田村の豪農として何代

も續いた小森家は彦太郎の代になつて壊滅に瀕して居る。鬱勃たる事業慾を押えることが出来ず、彼は山林の一部を抵當にして信用會社から資本の融通を受け、糞尿汲取事業を開始した。従來は百姓達が馬車を曳いて市の方に出行き、市内糞尿の汲取りをして居たが、自分達に肥料の必要でない時には中止する。市内に何人か居る商賣人も全部馬車か牛車であつて能率は渺々しくない。彼は桶及び二十荷を積めるトラックを一臺購入した。汲取賃肥料として農村へ賣り捌く収益とを合算し、近代的方法に依つて市民の大半を得意に取り得るは必定であつて、必要諸経費を差引いても、相當の剩餘金のあることは確實である。彼は意氣揚々として、周圍の人々の冷笑の中に開業した。ところが始めてみると、彼の算盤は片端から違算におつつかつた。第一、營業の許可問題でこたへた。市中にはトラックを何處にも入れることの出来ないために、桶用リヤカーを作り、汲取つた桶を一定の場所に集めておいて、トラックを廻して積み込む外なく、一ヶ所ではトラックにしたことが用を爲さないため、リヤカーも二つ作り、桶も八十荷作り、汲取人夫は六人もよけい雇ひ入れた。其の外、色々の事業の面倒な經緯は省略するとして、彼が商賣を始めてから十年間に、先祖から殘されて來た山林田畠はもとより、家屋數まで悉く人手にわたり、あるものとは、ただ、今に見て居れ、

という彦太郎の執念ばかりとなつた。トラックも幾度か抵當に入り、幾度か差押えの厄に遭つた。彼がひたすら失敗と没落の道をたどつて行つたのには、他の重要な原因として、彼がなかなかの酒好きであつたことがひとつ、もう一つには、この地方が非常に政治的にうるさいところで、政黨政派の關係があらゆる商賣取引に浸潤し、政黨への顧慮なくしてはいかなる商賣も成立しなかつたことが、ひとつである。彼は村にも家にも歸らなくなつた。歸れなくなつたことが本當かも知れない。海濱に近い野原の片隅にトラックを入れるバラック小屋を建て、その横に四疊半の一部屋をこしらえて其處に起き臥し、不自由な自炊をした。初めはがみがみと叱言を云い、中頃には愚痴をこぼしていた女房も、この頃ではなんにも云わなくなつた。村に肥料を賣りに出かける時折に、家に立ち寄つてみるのであるが、何時行つても女房のとしのは畠に出てゐるか、藥を打つてゐるか、機を織つてゐるかして働いてゐた。十二になる徳次と、八つになつて今年から學校に行くことになつた千代子とは父が居なくとも元氣に大きくなつた。心からの親しみを見せない子供を淋しく思つたけれども、今に、ゆつくりと一緒に暮らすことになる日があると思ひ、その時こそ心行くまで楽しい生活が味わえると思つた。村の誰彼が彼を目して、低能といい、阿呆といい、お人よしといい、全く馬鹿のひ

とおぼえ、「長久命の長助」だと、嘲笑して居ることも知つて居る。今に見て居れ、という言葉は彼の宗教のごとくなつた。工兵隊の作つた山道をトラックは古びた體軀をがたつかせながら、下りはじめた。警戒しながら速力をゆるめると、急にさあつと冷たい風が横から頬をうつたので、我に返つたように彦太郎が見あげると、亭々と聳える杉林の上は、何時の間に、いつばいの黒雲に掩われてのしかかるように暗く、同じように顔をあげた運轉手と眼を見合わせ、飄箏のような顔の澤田が、眉をひそめて口を尖らせたが、ぼつりと、頬にひとつ、來たという澤田の聲に命令されたように、さあと大粒の雨が一齊にまつ白く降り出した。石臼をひくように遠くから起つて來た雷が、いきなり頭の馬上で恐ろしい音を立て、杉林にひとしきりはげしい雨の音を叩きつけた。赭土の道に豆粒をまくように穴をあけてつきささるはげしい雨脚を眺めながら、彦太郎は、ひよつくり、吃りの天野久太郎のことを思い出し、今夜は是非天野を説得して組合のことを協議しなければならぬ、と思つた。

朝早く、車體検査のため、澤田がトラックを運轉して出た後、彦太郎は油で汚れた手を洗濯石鹸で洗つて、柱に腰を下すと、昨夜残しておいた醃酩のあつたのを思い出し、細目の金網の張つたみずやの中から一升徳利を取り出した。栓をとつて覗いてみると、半分程あるらし

いので、彼は人の好きそうな笑いを浮かべ、湯呑茶碗にツイで、ごくんごくと飲んだ。咽喉を透る痺れるような氣持をたしなむように眼をつぶり、右手で胸を押え、しばらくじつとしていた。食道をすぎて胃袋に入つて行くのがはつきりわかり、精氣がついたように身體中が膨れて來るのを感じた。これで今日も一日元氣で働けると思い、彼の苦難に満ちた四十五年の生涯が、この一杯の醃酩の中に溶けこんでしまつたような、洋々とした氣持になつた。三杯ほど引つかけ、立ち上ると、集金帳を下げて表に出た。ぎらぎらと光る砂が彼の眼を射すくめだが、陽炎のあがるその砂丘の向こうに、幻燈のようにまつ青な海が横たわり、防波堤に白い飛沫をあげて、だうんだうんと鳴つていた。彼は大きな欠伸をして、トラック小屋の上に近頃塗りがえて揚げた新しい看板を振り仰いだ。

市指定汲取人
衛生舍
電話六八九番

純白なペンキの色が一層彦太郎を楽しくした。今度入れた市指定の三字を何度も繰り返して眺め、よしよしという風にもつたいいらしくうなずいた。それからトラック小屋の裏手に廻ると、大きな聲で、よいい、居るか、と呼んだ。はい、と掘立小屋の中から鈍重な返事が聞え、赤錆びたトタンの扉をめくつて、長髯をしごきながら、ひよる長い李聖學の顔が出た。これから集金に廻るが従いて来んか、と彦太郎がいうと、急に顔を顰めて、どうも昨夜から腹が痛いですから、と云い、返事も待たず、馬鹿にしたような薄笑いを浮かべて、がたんとトタンの扉を下してしまつた。彦太郎が舌打して、早魘で水量の減つた唐人川に沿うて下つて行くと、背中に、掘立小屋の中で、妙な節廻しで李聖學が朝鮮の歌を呶鳴つてゐる聲が聞えた。その間ののびた歌聲は明らかに彦太郎を嘲弄した調子を帯びていたけれども、彦太郎は一向通じない様子で、自分も釣られたように、口三味線を入れながら、三勝半七酒屋之段のいくだりか何かを口吟み出した。この浮かれた気分は彼にとつて彼を實に幸運な事態にみちびいた出来事が起つた。彼がしまいには手で調子を取りながら唐人川の最下流にかかつてゐる土橋をわたりにかけた時である。いつたいこの幅一間に足りない小川はこの市にある唯一の溪流で、佐原山の裏手に連なる笹倉山の奥に源を發してゐるのであるが、昔、明治初年頃、

滔々として文明開化の流れがこの一寒村にも沁みわたつて来た時、この附近にコークス工場が出来、一人の佛蘭西人が技師としてその頃の人達が眼を廻したほど高い給金で雇われて来たが、その外國人がこの小川に砂金が採れるなど云い出し一時非常に騒がれたことがあつた。その爲に全くの海濱であつたこの小川の下流にたちまち部落が出来てしまつたほどである。その爲昔はこの川には別の名があつたのであらうが、何時の頃からか唐人川と呼ばれるようになったのである。明治初年頃には二百戸に満たない一漁村であつたこの市は、鐵道の開通、築港の完成、石炭の採掘積出し、等によつて急速に進展したのであるが、この唐人川の下流に砂金の宣傳によつて出現した部落は、この發展の中心から全く置き忘れられたように、昔のままの姿であつた。コークス工場も何時の間にか無くなり、その外國人も何處に行つたやら消えてしまつたが、ここに残つた一劃の部落は、その後町の發展の圏外にありながら、一つの任務を帯びるようになった。このドノゴオ・トンカは、金を採るかわりに塵芥を取る部落となつた。村は海岸に望んで五十戸程密集し、背後の丘の上には赤煉瓦の市立塵芥焼却場があつて、百七十尺の高い煙突が聳えて薄黒い煙をはいてゐる。海濱や道傍の到る處に塵埃の山があり、馬車が何臺も道にたがれてあつて、足の太い馬が毛の抜けた鬘を振つて

瀬そうに嘶いいている。彦太郎が唐人川の土橋に足をかけた途端、それらの塵芥ちんがいの山の一つに立つている三人の半被姿はんびその男が、ほれ見い、糞男ふんどしが行くぞ、生意氣な奴だ、この頃、俺たちの仕事の邪魔をしようとして居やがる、とかなんとか、がやがやと話し出したと見る間に、腰をかがめて、塵芥の山から、ブリキ罐かんや、釘の折れや、竹切れなどを拾つて、塵の礫れきを飛ばし出した。刺のあるこれらの手榴弾しゅりゅうだんは雨霰あられと彦太郎の背後に落下したけれども、そのけたたましい音を耳にしながらも、彦太郎はそれが自分を襲う敵弾だと考え及ぶには、幸にも、あまりによい機嫌になり過ぎていたのである。罐詰かんじつの殻が彼の右足に命中したにもかかわらず、彼は振りむこうともせず、今ごろは半七さん、何處にどうしてござろうぞ、と、一層調子を高めながら、悠揚ゆうようせまらず、橋をわたり、町の方へ出て行つた。

集金帳を繰りながら、彼はあちこちの家に立ち寄つた。大黒様のついた黄色い財布さいふは次第に錢で膨はくれて行つたが、彼は次第に先刻からの氣分を失いはじめて、だんだん憂鬱ゆううつになつていた。一ヶ月勘定きやうていになつていたので、僅かな汲取料金であるし、歩きさえすれば、すぐにでも集金は済みそうなのであつたが、實際はそうではなかつた。三べんも四へんも足を運ばせ、誰が居ないから判らないとか、今日は都合が悪いとか云つた揚句、ようやく五度

目位に、やつとくれるような家が何軒もあつた。先月までは家族五人だつたが、娘が一人このほど嫁に行つたから、十錢だけ引いてくれ、などといい、引かなければ他の汲取人に頼むからとすぐ云うので、仕方なしに割引したりする家も何軒かあつた。汲取り方が悪くて不潔で仕方がない、あんな取り方をするなら金を拂わぬ、と叱言を云い、今後注意しますからと平身低頭して陳謝すると、なおも飯時めしときに取りに来て貰つては困るとか、色々と口喧しく云つた揚句、今日はいかんから明後日頃あさって来てみてくれ、などという家もあつた。一ヶ月普通三十錢、家族の多いところで五十錢位なのだが、集金のたびにに出合うこういう事も、長年のことで、最初ほどむきになつて腹が立つたり不愉快になつたりすることはなく、馴れてしまつていたのであるが、やはり、どうにも面白くなく、こんな目に合うたびに、彦太郎は何時も親切な赤瀬氏の奥さんを思い出す。赤瀬氏の奥さんはいつ汲取りに行つてもにこにこして、御苦勞さん、ありがと、と云いながら、いくらかの酒代さかづきをかならず包んでくれるのである。赤瀬春吉氏は彼の事業にとつては更生の恩人である。しかしながら、夕方近くなつて、大抵一廻りすんだ頃には、例のごとく、もとの氣分に返つて、膨れた財布を胴巻どうまきに入れ、少し得意を増さねばいかんと思ひ、心當りの家々を訪れて頼んで歩いた。歩き疲れて、日の暮れ近く、トラ

ツク小屋に歸つて來ると、トラックも歸つて居つて、運轉手の澤田がバケツに水を入れてタイヤを洗つていた。御苦勞だつたなあ、と聲をかけると、ああと横柄に答えて、眼鏡の下から見あげるように、今度は六ヶ月間でしたよ、うまく行きましたが、もうシリンドラは取り換えた方がええですな、と口を尖らせて云つた。仕方がないな、と彦太郎は答へ、老齡のため何かと修繕代の嵩む自動車を一寸怨めしそうに見たが、もとよりそれは心からの恨みでは毛頭なく寧ろ長い間、自分と苦難を俱にして來たために、こんなにも古ぼけた傷ましい姿になり果てたトラックへの限らない哀惜のころであつた。彼は一寸感傷的になり、赤瀬の大將に相談してみるから、と澤田に云い捨てて小屋の裏に廻り、金本よ、トラックが歸つたから明朝は高崎町方面と學校の方へ廻つてくれ、外の者にも傳えてくれ、とトタンの扉を叩いて云つた。金本というのは李聖學の日本名であつた。朝鮮人は内地に來ると皆日本の名前をつけるのだ。はあい、と中から睡そうな聲が聞えた。急に腹の減つたのを思い出し、小屋に歸つて來ると、樞に腰を下して、一升徳利に口をつけて、ごくごくぐくと飲むと、食道を燒酎がじいんと鳴つて通り、胃袋に來て胃壁に沁みわたつた。燒酎は一口しか残つていなかった。顔が火照り始め、身體が温もつて來ると、横になつたが、疲れが出て來て、澤田が自動車の掃

除をすまして出て行きながら、小森さん、ガソリンも切れてますよ、と喚いて行つたのに、返事をしたようでもあり、せんようでもあり、土間に轉がつたまま、眠つてしまつた。やがて、齒軋りをはじめ、があと大きな軋をかきはじめた。氣がつくと彦太郎は小高い丘の上に天野久太郎と二人で立つている。今までは彼の商賣敵であつた背の低い猿のような久太郎が、古風な山高帽を被つて彼の傍に居るのが、同じような久太郎が二人居るように見え、四人位居るようにも見え、彼はふつと氣がついて、なるほど今日は汲取人組合の發會式なのだと思ひ出した。すると足もとからすると旗が上り、妙に細長い白い旗が見あげる天空に翻えつた。天野久太郎は顔をあげて、くるくると丸い眼を輝かせながら、今まで、お互が無駄な競争をして居つたのは大いに間違ひであつた。今後は大いに協力一致、手を取り合つて進もう、我々の團結に依つて、横柄な得意の人達にも思ひ知らせることの出来るのは愉快なことである、我々が競争し、得意を奪ひ合うために、段々と汲取賃が低下したことは何という馬鹿げたことであつたか、かかる不潔なる仕事をしながら、安い汲取賃の支給を受け、しかも聞くに耐えぬ侮辱を受けなければならぬ道理はない、組合が出来た以上は、も早、市民は協定以外の料金を以て、如何なる者にも汲取りを依頼することが出来ない、割引しなければ別